ドイツ語・日本語二言語による e-Tandem 学習プロジェクト（２）

中川慎二

０　はじめに

２０１２年度～２０１３年度の本学言語教育研究センター・ドイツ語共同研究プロジェクトとして実施した E-Mail によるタンデム学習について報告する。２０１２年度は授業時間外の自由参加のプログラムとして学習者に提供した[1]が、２０１３年度には、関西学院大学では[2]言語教育研究センターの選択科目「ドイツ語アラカルト（聞く・話す）」の枠組みで参加者を募集した。

２０１２年度春学期に開始したタンデム学習プロジェクトは、関西学院大学におけるドイツ語学習者（言語教育研究センターの科目履修者と２０１２年度夏期ドイツ語研修参加者）と協定校であるドイツ・ボーフム大学（東アジア学部）における日本語学習者との組み合わせで、ドイツ語・日本語二言語による E-Mail タンデム学習として開始した。それぞれの大学で、授業時間外の自由参加の形で実施し、それぞれの大学の教員の周辺で参加者を募集した。関西学院大学では、春学期は１２名（12 ペア）、秋学期は９名（9 ペア）の参加者があった。ただし、研究目的でのデータ使用を当初から意図していたので、最初の導入時に参加者に説明し協力を求めた。

２０１３年度春学期はボーフム大学側では十分な参加者が集まらなかったために、デュッセルドルフ大学人文学部現代日本研究所の協力をえて、タンデム・パートナーを確保した。また、２０１３年度春学期をもってボーフム大学での参加者募集は一旦打ち切りになったために、２０１３年度秋学期のパートナーは、デュッセルドルフ大学の参加者のみとなったが、これで２年間の E-Mail タンデム学習プロジェクトは終了した。２０１３年度は、春学期５名（６ペア）、秋学期２名（３ペア）が参加した。

本稿では、過去２年間の E-Mail タンデム学習プロジェクトに関して報告するとともに、E-Mail タンデム学習におけるコミュニケーションの展開を考察する。参加者の E-Mail によるコミュニケーション・データについては、２０１２年度秋学期の参加者から一つのペアを選び、談話分析を通して見えてくるコミュニケーション上の変化を記述し、分析する。このプロジェクトは、基本的に学習者にとっての学習プログラムであるが、研究のために

---

[1] 2012 年度のプロジェクトに関しては、関西学院大学言語教育研究センター紀要第 16 号(2013)「ドイツ語＝日本語二言語による e-Tandem 学習プロジェクト」を参照。また、Nakagawa/Handa（共著）で、日本独文学会ドイツ語教授法ゼミナールでポスター発表(2013 年 3 月)を行った。また、IDT　(Internationale Tagung der Deutschlehrerinnen und Deutschlehrer 2013)でもポスター発表を行った。（2013 年 8 月 1 日）

[2] ボーフム大学、デュッセルドルフ大学では授業時間外に自由参加のプログラムとして実施された。ただし、デュッセルドルフ大学は授業時間内のプログラムを協定校と共同で実施しているものがある。

データ収集を行うことも説明したうえで実施した。従って、参加者の募集に関しても条件の統制は行っていない。

１　２０１２年度の E-Mail タンデム・プロジェクトとテーマ・ガイド

本学協定校のルール大学（ドイツ Bochum 市、ボッフム大学とも呼ばれる）、東アジア学部で日本語教育を担当している半田加奈子講師からの申し出により、関西学院大学側では筆者が協力することになった。２０１２年度４月にプロジェクトを開始し、春学期６週間、秋学期８週間の学習プログラムとして定期試験等に支障のない時期の実施とした。期間の設定が違うだけで、学期毎のプログラムの内容はほぼ同じである。学習プログラムではあるが、授業時間外の自由参加のパイロット・プロジェクトとして実施し、言語学習者のポートフォリオ開発も同時に合わせて行った[3]。６週間ないし８週間はそれぞれ４つの期間にわけて、その期間ごとに話題として、まずは「自己紹介」から始め、「私の街」として出身地、現在の居住地、大学の位置する市、あるいはそれ以外の街を選んでもらった。E-Mail の中に「私の街」について触れるのである。それ以外には「私が大切にしているもの」「自由な話題」を課題としたが、ペアによって話題の進展には違いがあり、緩やかなガイドラインのような役割を果たした。

２　タンデム学習と接触場面

Müller-Hartmann(2000)によると「タンデム自転車[4]での外国語学習を組織する方法の一つで、その方法によって少なくとも２つの異なる母語の話し手はお互いの言語や文化を相互に学び、ある程度教えるようにする。個別あるいはグループでのタンデムは、部分的に自律的な学習の文脈を構成するが、それはたいてい２国間の対面あるいはバーチャルな出会いとして組織される」(p.595)と説明され、外国語教育ではコミュニカティヴ・アプローチ（教室内での相互学習）から異文化間能力(Byram 1997；中川 2010)を統合した外国語学習へと発展させた結果であると説明され、母語話者やその文化との接触を増やすことにつながっているとされる[5]。

タンデム学習は、１９７０年代の青少年交流プログラムに遡ることができる。そこではドイツ語＝フランス語タンデム学習が、２か国の休暇中の青少年によって対面で行われた。

---

[3] 関西学院大学特定プロジェクトセンター「言語学習者のためのポルトフォリオ研究開発センター」との共同で行った。

[4] ２人以上が同時に乗ることのできる自転車のことで、２人乗り自転車は比較的知られている。そのイメージに基づいて命名されているという意味である。一人乗りの倍以上の力が出力されると倍以上の高速で走行できるとされる。したがって、マイナスの相乗効果が出る場合も想定しなければならない。

[5] 筆者は、タンデム学習の場合は、母語話者の言語行動が規範となるとは必ずしも考えておらず、二言語使用というタンデム学習の条件と、それぞれの学習者がそれぞれの言語文化の空間のなかでヴァーチャルに異文化と接触しながら異文化間能力を習得していくプロセスであると考えている。

また、タンデム学習のコンセプトについては１９世紀のチューター制度[6]（イギリスの伝統的な大学では、学習者同士のタンデム、学習者と教授者とのチューターなども現在まで実施されている）に遡ることができるという。

さて、タンデム学習では学習者がそのパートナーと共に「自律的」に「相互学習」を構成していくところが特徴である。E-Mail によるタンデムの場合、インターネットというコミュニケーションのチャンネルを利用し、タンデム・パートナーとは相互に母語（ないし、第１言語）と外国語（大学における初修外国語、学習目標言語）を使用しているのである。

今回の E-タンデム・プロジェクトでは、学習者はパートナーの学習言語の母語話者（第１言語話者）、つまり言語ホストとしてその言語を使用していること、プログラムの中で設定された課題に関しては、パートナーの提出した課題の言語使用に可能なかぎり１０か所まで訂正行為[7]を行うことが求められたが、そのことが接触場面[8] における規範形成にどのような影響を与えているのかを考察することも重要である。これは従来の言語学的な考察では言語規範が母語話者の側に確保されている場合が多く[9]、ファーガソンの外国人話法(foreigner talk)の議論をはじめとして、接触場面での言語行動が母語話者の母語規範から評価されがちである。しかし、今回の E-Mail タンデム 学習では基本的に母語（第１言語）と外国語（大学での初修外国語）の二言語を使用しているために、face-to-face の接触場面で、母語話者と非母語話者の間のコミュニケーション場面で生じるのとは違った形で、より「均衡的な」規範が構成されるのではないかと期待した。これが、異文化間能力として習得されると、タンデム学習としては大きな成果となるが、学習がその均衡へと向かうプロセスが繰り返されることが必要で、これは６～８週間という短い期間で簡単には達成されないものであろう。

しかし、今回の E-Mail タンデム 学習では、学習者がそれぞれのパートナーの学習目標言語の母語話者としてその言語を使用していることと、設定された課題に対しては可能な

---

[6] 平成１２年度文部省科学研究費補助金基盤研究Ａ(２)「米国の大学入学後の教育選抜システムに関する研究」にはイギリスのチューター制度に関する研究がある。

[7] この訂正行為に関しては、基本的に異文化接触場面での二言語使用であるので、言語管理の観点から指摘できる現象が見られた。母語話者の母語使用に関しては、非母語話者に影響を与えやすいのではないかと理論的には想定できる。また、メールのやり取りでは、後述するように、一定のテーマに沿って文章を書いた場合に、10 か所までの訂正を行い返信することを課題としたので、その部分の訂正行為は、コミュニケーション上発生した言語管理とは性質の違うものであるが、これらの影響も考察できる。この訂正という課題があったために、E-Mail タンデムのメール本文での言語的誤りの訂正（修復）はほとんど見られなかったが、文化や社会にかかわる修復は観察された。

[8] ネウストプニー(1995)『新しい日本語教育のために』第８章にはネウストプニーが当時考えていた接触場面を言語管理の視点から研究する方法がまとめられているが、ネウストプニーは『外国人とのコミュニケーション』(1982)の中でもすでに言語管理のプロセスの原型を二章「外国人はどう行動するか」で示しており、それが「外来のラベル」である。

[9] 『ヨーロッパ言語共通参照枠』(2001)では、言語学習のモデルに理想的母語話者を立てずに、非母語話者の言語権を積極的に評価しようとしている。（中川 2013）

訂正行為を行うことが求められていたために、最初から言語ホストの役割が期待されており、言語管理理論における「否定的に評価された逸脱」(加藤 2011)における規範が母語話者の母語規範になりがちであると考えられる。

また、タンデム学習と教室での外国語学習との違いは、そのセッティング（言語使用の環境、条件、文脈）にある。教室内コミュニケーションは当該言語が使用される社会や文化とは違う形で構成された学習場面であり、ある意味では「自然」ではあるものの、基本的には「人為的」につくられた空間である。教室内コミュニケーションとは違って、E-Mail タンデムのコミュニケーションは、その参加者がそれぞれ母語（ないし第 1 言語）と外国語（学習言語、パートナー言語）を使用することで、コミュニケーションそのものは authentisch（真正）なものであると言えるが、二言語使用のルールによって「訂正行為を行う母語話者」と「当該言語の学習者である非母語話者」という権力関係がそれぞれに発生する。しかし、ドイツ語・日本語の２言語でメールを送信するために生じる権力関係の緩和が見られた。つまり、対面コミュニケーションの場合にコミュニケーションの参加者が共有している空間と時間は、対面コミュニケーションでの修復行動や調整行動に影響を与えながら、相互作用の指標が観察される。しかし、別の空間でメールを書く作業を行い、ドイツと日本での時間差に加えて、ユビキタス特有の「いつでも、どこでも」メールがかけるために生ずる非同時的相互作用では、時間差があるために、対面で瞬時に発生する話者交代が発生しないし、修復や訂正などもゆっくり生ずることになる。

３　E-Mail によるタンデムの言語

Koch/Oeterreich(1985)は言語メディアとそのメディア性について議論している。ここでは、Dürscheid(2003)により、Koch/Oeterreich の議論を簡略に示すことで、e-Mail によるタンデム学習プロジェクトでの言語使用の特性について総括し、今回のタンデム・プロジェクトで収集した言語データの分析の可能性を示しておきたい。

Koch/Oeterreich の議論は、現在のメディア・コミュニケーションを総括する議論ではないが、言語メディアとメディア言語の問題を整理するうえで有用である。Koch/Oeterreich は、言語の「話しことば性」(Mündlichkeit)と「書きことば性」(Schriftlichkeit)に着目し、そのそれぞれに「メディアに関わる」(medial)と「コンセプト的な」(konzeptionell)という分析上の尺度を援用し二つの志向性として分類した。メディア的な次元は音声や文字を通して実現された発話/言説(Äußerung)の表出に関する次元であり、コンセプト的な次元は筆致（Duktus)、つまり発話/言説(Äußerung)で選択された表現方法に関わるとされる。「メディア的な」性質は「話しことば性」と「書きことば性」の 2 つに分かれるが、「コンセプト的な」性質は「話しことば性」と「書きことば性」とは連続体をなし、その両極に「話しことば」の極と「書きことば」の極が位置していると理解する。それを、それぞれの近さ（近さの言語)、遠さ（遠さの言語）という連想で置き換え、例えば家族の会話は、自己紹介のスピーチよりも「話しことば性」に近いと説明し、私的なものと理解するのである。

コミュニケーションの空間的な近さ、コミュニケーションの参加者の親密性、コミュニケーションというイヴェントの「私人性」(Privatheit)あるいは「公共性」(Öffentlichkeit)、コミュニケーションの条件などかそれに加わる目印となる。Dürscheid(2003)はそれに加えて、Holly(1997)により、テクスト外的な特徴をあげ、独話的(mologisch)、対話的(dialogisch)、同時的(synchron)、非同時的(asynchron)などをあげている。

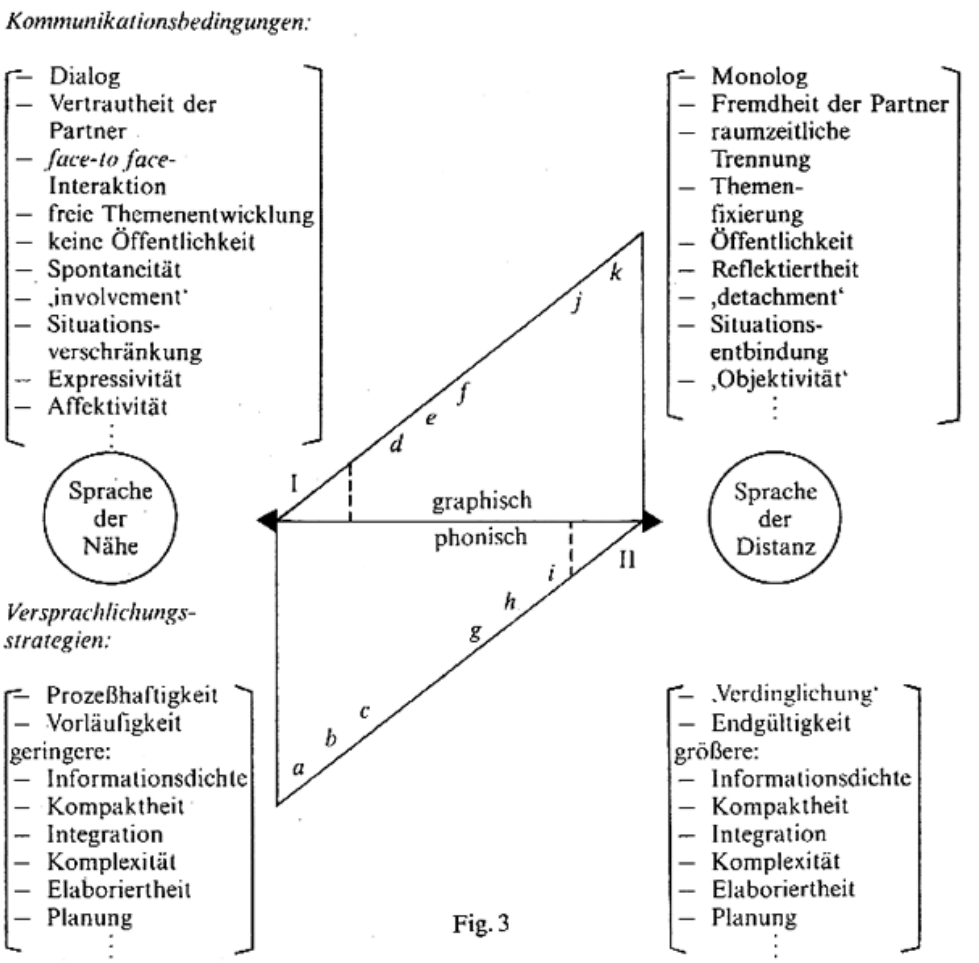

図１（原著では図３）　「近さの言語と遠さの言語」　Koch/Oesterreich(1985: 23)

4　コミュニケーション管理[10]　－E-Mail タンデムという学習プログラムにおけるコミュ

[10] 言語管理よりも広い概念としてコミュニケーション管理という用語を用いた。もともとは、A. Schegloff 他(1977)の会話における修復の考え方に依っている。E-Mail タンデムでは、通常の会話分析の対象とは違い、Sacks 他(1974)が分析したような話者交代は起こらない。SMS やチャット、あるいは LINE のようなメディアであれば、話者交代が頻繁に起こりうる。しかし、E-Mail でのやり取りでは、基本的にメールごとにしか話者（書き手）交

ニケーション上の修復と課題としての訂正

ここで分析対象としたのは、２０１２年度秋学期に実施した、授業時間外の E-Mail タンデム・プロジェクトに参加した一つのペアのコミュニケーションである。コミュニケーション上の枠組みは、まず参加者が日本語母語話者でドイツ語学習者とドイツ語母語話者で日本語学習者の組合せである。２０１２年秋学期は全体が８週間のプログラムで、２週間ごとに E-Mail タンデムの　話題を提供した。また、この秋学期は１０組のペアで開始した。学習目標は、自律的学習能力を、パートナーと共に開発することで、２週間ごとに少なくとも１回は自らパートナーにメールを書くこと、パートナーのメールに返事を書くこと、パートナーのメールの母語の部分に対しては最大１０か所まで訂正して返送してあげること、日記を書くことが２週間のうちにこなすべき課題であった。日記には、メールでのやり取りに関して自分の感じたこと、考えたこと、行ったことを書く。言語教育研究でいう学習者の日記で、パートナーとのコミュニケーションでは、外国語話者としてまた母語話者としての経験をし、自分のコミュニケーションを振り返ることができるようになることが、到達目標である。

Egbert(2009)は Schegloff(1992)によって、修復(Reparatur)を 4 つに分類している。発話の産出によって生じた修復(Reparatur) を指し示すこと(Initiierung)と、その指し示しのあとで生じた修復を含むターン（発話）の話者との組合せで 4 種類となる。修復については、訂正（正しく言い換える）という調整が行われる以外にも、言葉さがしをしていたり、表面上は明確な誤りを含まないが言い換えをしているなど、聞き手が何らかの指し示しを行い、何らかの調整行動が発生する場合であると理解されている。Schegloff(1992)も、Egbert(2009)も基本的には訂正(Korrektur)の概念に近い解釈をしており、そこからいわゆるトラブル源とその解決として理解されている。今回の分析対象である E-Mail タンデムの場合は、話者交代とその組織化については、会話データのように分析できないことから、いわゆる修復も違った形でより緩やかに生じることが予想される。また、学習プログラムの課題として相手のメールの訂正が最大で 10 か所まで行われていることと、外国語（第 3 言語、第 4 言語。英語やフランス語が第 2 言語、第 3 言語の場合は、日本語は第 4 言語になる。）と母語（第 1 言語、移民の場合には第 2 言語である場合ある。）の 2 言語でやり取りが行われているために、通常のメールのやり取りでは、これらの訂正(Korrektur)に近い修復があまり見られない場合もあると予想される。

ここで、コミュニケーション管理というのは、基本的に修復すべきトラブル源が留意され、調整行動（調整するか、あるいは調整しない）につながる管理プロセスのことを指しており、今回のデータが会話ではないために、長い時間の間隔を伴いながら、ネウストプ

代が起こらない。しかし、E-Mail の返信には、返信元メール（直接に返信されることになった元のメール）を想起させるような程度の痕跡ないし対応関係が認められるために、話者交代を想定した修復が可能になると考える。

ニーの提唱した言語規範、社会言語的規範、社会文化的規範に関わって、コミュニケーション[11]全体を管理するものだと理解しており、その趣旨でメールによるコミュニケーションがどのように８週間のうちに進展したかを考察しようと試みた。

５　分析

ここでは、２０１２年度秋学期で８週間の学習プログラムを順調に進んだペアから１組選び、そのペアのコミュニケーションを主に分析する。引用での記号については以下の通り。名前はすべて仮名である。

省略記号:

M: E-Mail（本文）, MS: Muttersprachler（母語話者）, NMS: Nichtmuttersprachler（非母語話者）, D: Deutsch（ドイツ語）, J: Japanisch（日本語）, RUB: Ruhr-Universität Bochum（ボーフム大学）, KGU: Kwansei-Gakuin-Universität（関西学院大学）

凡例　M8K: Kevin の送信した E-Mail ８番目, TB1-T: Takae の書いた日記１

E-Mail タンデムによるコミュニケーションとその言語データには以下のような特徴がみられる。

・E-Mail タンデム学習というプログラムの枠組み：学習プログラムとしての開始と終了が強く意識されている。そのために、ほとんどのペアで、学習プログラムの期間が終了した後は、メールのやり取りが滞っている。

・コミュニケーションの方向性：パートナーと対話的に構築されるもので、前のメールに対する「返信」として E-Mail が書かれることで、前のメールとの関わり（Rückbezug）が発生する。

・タンデム参加者：各ペアは MSJ であるドイツ語学習者と MSD である日本語学習者の２名からなる。パートナーからの E-Mail を最大 10 か所まで訂正して返信するという課題を課していたために、MSJ として日本語に対する言語ホスト、MSD としての言語ホストの役割が意識されていると考えられる。

表１には、今回の談話分析の対象としたペア１（2012/13）を含む２ペアのコミュニケーションの頻度と時間の間隔について記述しておこう。9 組のペアが参加したが、頻度[12]では 16 回（4,5,1,4,2）、9 回（3,2,1,3,0）、16 回（7,6,1,2,0）、7 回（4,2,1,0,0）、1 回（0,1,0,0,0）、3 回（0,1,0,0,0）、5 回（2,2,1,0,0）、0 回、0 回であった。安定したコミュニケーションが見られたのは 2 ペア[13]のみで、それ以外のペアでは E-Mail でのやり取りがおもに前半の期

---

[11] ネウストプニーは、インターアクションを上位概念としており、コミュニケーション管理という概念はこの研究での用語である。

[12] （　）内には表１に示した期間ごとの頻度を示した。

[13] この 2 ペアの分析を IDT 2013　で発表した。

間に集中しており、後半にはコミュニケーションが打ち切られたり、そもそもメールのやり取りが行われていないペアもあった。つまり、タンデム学習の相乗効果がプラスにもマイナスにも出た例ということができる。2013 年度は関西学院大学では授業の枠組みで実施したために､パートナーの紹介をした後で E-Mail のやり取りは 8 週間の期間中は継続して安定的に行われた。また、2013 年度は、日本側では授業の枠組みで実施したために、ドイツ側でコミュニケーションが継続されなかった場合には、第 2 のパートナーを紹介した。また、ドイツ側で参加希望者が 1 名多かったために、日本側では 1 名の参加者が 2 名のパートナーとやり取りをした例がある。また、ドイツ側でも日本側でも E-Mail タンデム学習は、参加者による自律学習を促進するという目的をもっており、そのように導入し説明している。また、学習プログラムという性格上、E-Mail のやり取りでは緩やかな話題を設定した。そのために、参加者の E-Mail の本文に、教員が名指されることがあり（2012 年度秋学期)、E-Mail によるコミュニケーションに影響を与えていることが観察された。

表 1　コミュニケーションの頻度と間隔（2 ペア）

WS 2012/13		Häufigkeit der Korrespondenz		Dauer bis zur Reaktion (Tage)	
Datum	Woche	Paar 1	Paar 2	Paar 1	Paar 2
29.10.-04.11.	Woche 1	4 Mal	3 Mal	4×1T	1×1T,1×3T
05.11.-18.11.	Woche 2-3	5 Mal	2 Mal	2×1T,1×6T,1×7T	1×14T,1×4T
19.11.-02.12.	Woche 4-5	1 Mal	1 Mal	1×7T	1×18T
03.12.-16.12.	Woche 6-7	4 Mal	3 Mal	1×11T,2×2T,1×3T	1×2T,1×4T,1×1T
17.12.-23.12.	Woche 8	2 Mal	0 Mal	1×8T,1×9T	1×0T

・空間的次元：日本とドイツの間でのやり取りであり、隔たりがあり、メディアを通したコミュニケーションである。Skype のテレビ電話機能を利用してコミュニケーションを取ったペアがあった。その場合には、空間は疑似的に接近するが共有はしない。
・時間的次元：基本的に同時ではない。
・メディア：パーソナル・コンピューターでメールソフトを利用しているが、google メールや yahoo メールを利用した参加者の場合は、携帯でも送受信していることがある。
・E-Mail による言語特性：文字媒体を使用しているが、チャットや LINE のやり取りよりは書きことば性が強く、話しことば性が弱い。ただ、E-Mail タンデムでのコミュニケーションでは書きことば性より話しことば性が強い。また、エモティコンの使用も見られ、携帯メールや SMS との近さも見られる。パートナーとの E-Mail タンデムという自律学習であるために Koch/Oesterreich(1985)のいう「私人性」が認められるもの、協定大学や外国の大学との間で行われる学習プログラムという点からも（2013 年度は授業の枠組みで行ったために）言語使用に「公共性」が見いだされた。それがパートナーとのコミュニケーションの中では、たとえば「教員」が名指されることによってタンデムのテーマを確認した

場面では言語化していたと考えられる。

以下の分析では、主に 2012 年度秋学期のペア 1 から引用する。また、引用箇所については[　]に筆者の日本語訳を添えている。また、E-Mail の引用は母語使用の部分を主に引用している。

ペア 1: (名前:仮名) ⇒ T1: トランスクリプト 1 (2012 年度秋学期)
K: Bergmann, Kevin (RUB): MSD; NMSJ, 第 3 学期
T: Imada, Takae (KGU): MSJ; NMSD, 第 3 学期

5-1 コミュニケーション管理で最上位の規範になっていたもの:
「コミュニケーションを続ける」「いい関係を保持する」
引用 1： … noch mehr kommunizieren möchte … (T1-TB-3T)
[もっとコミュニケートしたい]
引用 2： … wäre schön mit Takae in Kontakt bleiben zu können … (T1-TB-5K)
[タカエとこの先つながっていられたらいいのになあ]
何れも日記の記述で、パートナーに送信したメールではないが、Takae も Kevin も最上位規範に「コミュニケーションを続ける」意図があることが読み取れる。この学期の参加者も、自由参加であったために途中でコミュニケーションを継続しなかったペアが見られた。しかし、このペアは、最初から最後まで順調にコミュニケーションを維持できたペアである。

5-2 「スカイプ使いますよ」テレビ電話やチャットを言及し続ける
引用 3： PS：スカイプ(Skype)使いますか。(T1-M8K)
引用 4： P.S.　スカイプ使いますよ。(T1-M11T)
引用 5： eine letzte Frage noch: Möchtest du gerne über Skype chatten? (T1-M13K)
[最後にもう一つ質問：スカイプでチャットしたいの。]
引用 6：スカイプの名前は Srialcina が、私しか Kevin Bergmann と言うスカイプ名使う人がありません。(T1-M18K)
引用 7： Ich habe dich gefunden bei Skype.
[スカイプで見つけたわよ。]
Mein Name von Skype ist imada.takae62.
[私のスカイプ名は　imada.takae62 よ。] (T1-M19T)
引用 8： p.s.Kann ich chatten? (T1-M20T)
[チャットしていいの。]
他、T1-M22K, T1-TB-1K, T1-TB-2K にも該当箇所がる。

一貫して肯定的な表現を用いて、「コミュニケーションを続ける」ことと「良好な関係の維持」につながるメッセージを書いているが、一度もスカイプによるテレビ電話機能やチャット機能を利用しなかった。

5-3 コミュニケーションの組織化

Sacks et al(1974)が分析したように会話の組織化を E-Mail のやり取りに分析することは容易ではないが、前のメールと次のメールとはいわば隣接ペアのように呼応する例が見られる。（中川 2013） ２０１２年度春学期のやり取りから Nakata-Fabian ペアの最初のやり取りを見てみよう。

引用９

DJT2012SS_TH-P1_ver1（データ整理番号）			
Z	**SA**	**SE**	**M1D_von Nakata an Popper (HM) (26.5.2012, 20:16)**
1	D	N	(subject) Freut mich ! Ich bin ein Partner von Tandem-Lernen.
2	D	N	Guten Tag! Ich bin Shinji NAKATA. Freut mich !
3	D	N	Ich bin Student der Kwansei Gakuin University im zwei Studienjahr.
4	D	N	Mein Deutsch ist noch nicht gut, aber ich möchte besser werden.
5	D	N	An der Universität studiere ich das Gesetz.
6	D	N	Mein Hobby ist Futsal und Kochen.
7	D	N	Einmal in der Woche, habe ich Futsal spielen.
8	D	N	Ich höre hiphop bereitwillig vor kurzem.
9	D	N	Können Sie mir sagen die Künstler der Empfehlungen?
10	D	N	Genießen wir einen Tandem-Lernen.
			M1J_von Nakata an Popper　(HM) (26.5.2012, 20:16)
11	J	N	こんにちは！私は中田伸治です。はじめまして！
12	J	N	私は関西学院大学の二回生です。
13	J	N	まだ私はドイツ語が上手ではありませんが、上手になりたいです。
14	J	N	大学で、私は法律の勉強をしています。
15	J	N	私の趣味はフットサルや料理をすることです。
16	J	N	週に一度、私はフットサルをしています。
17	J	N	私は最近好んで HIPHOP を聞いています。
18	J	N	おすすめのアーティストを教えてくれますか？
19	J	N	タンデム学習を楽しみましょう。
			M2J_von Popper an Nakata　(AG in AT) (29.05.2012,　10:08)
20	J	P	今日は中田さん！

21	J	P	私はダミアン・ポッパーです。どうそよろしくお願いします。
22	J	P	ホルトハウゼンと言うの小さな町に住んでいますが、ルール大学で化学と日本語学を勉強しています。
23	J	P	今は二年生です。日本語はあまり上手ではない場合でも、いつか先生になろうと思います。
24	J	P	趣味は料理をすると劇を演じるのことです。中田さんのように週間で一度芝居の稽古があります。
25	J	P	スポーツはあまりしないが、フットサルはどんなスポーツだ教えてください。
26	J	P	音楽について全部のを聞いています。ドイツの HIPHOP 縁者を教えてもらいますか。
27	J	P	私は Clueso と Peter Fox は大好きです。でも今は Clueso は多くのポップミュジックをします。
28	J	P	Youtube では多くのビデオがあるから、ぜひみてください。
29	J	P	下に写真があります。タンデムは楽しみましょう！

M2D_von Popper an Nakata　(AG in AT) (29.05.2012,　10:08)

30	D	P	Hallo Shinji Nakata!
31	D	P	Ich bin Damian Popper, Dein Tandempartner. Freut mich, Dich kennenzulernen!
32	D	P	Ich wohne in einer kleinen Stadt namens Holthausen, studiere aber an der Ruhr-Universität Bochum Chemie und Japanisch.
33	D	P	Ich hoffe, irgendwann einmal Lehrer zu werden.
34	D	P	Meine Hobbys sind ebenfalls kochen und Theater spielen. Ähnlich wie Du habe ich einmal in der Woche Theaterprobe.
35	D	P	Ich mache nicht sehr viel Sport, aber bitte erkläre mir in Deiner nächsten E-Mail, was Futsal ist!
36	D	P	Was Musik angeht, so höre ich im Grunde genommen alles, ich habe keine bestimmten Vorlieben.
37	D	P	Meine Lieblingskünstler des deutschen Hip-Hop sind Peter Fox und Clueso, auch wenn Clueso heute mehr Pop-Musik macht.
38	D	P	Auf Youtube gibt es viele Videos von den beiden, also sieh sie Dir bitte mal an!
39	D	P	Ich habe unten noch ein Foto von mir angefügt, damit Du siehst, wie ich aussehe.
40	D	P	
41	D	P	Ich hoffe, dass wir beide an dem Tandemprojekt Spaß haben werden!

(Foto von Popper)

この引用で分かるように、メール本文は、それぞれで独立した自己紹介という文脈を構成しているにもかかわらず、Nakata が Fabian に宛てて書いた最初のメールの内容に、Fabian の返信が正確に呼応しており、まるで初対面でそれぞれが自己紹介をし合っているかのような交信になっている。また、Fabian の日記（2012 年 5 月 26 日）には（引用 10）、

26.5.12: Heute kam die erste Mail von meinem Tandempartner. Sie ist zwar recht kurz, aber da ich gerade auf der Arbeit bin, habe ich keine Zeit, sie genau zu lesen. Ich verschiebe es auf morgen.

[2012 年 5 月 26 日　今日私のパートナーからはじめてのメールが来た。それは短いけど、ちょうど作業中だったので、それを読む時間が時間がなかった。明日にしよう。]

27.5.12: Die Mail ist zwar kurz, aber ich erfahre einiges über Nakata-san, insbesondere über seine Hobbies. In meiner Antwort werde ich auch darauf eingehen. [傍線筆者]

[2012 年 5 月 27 日　そのメールは短かったけど、中田さんのことがちょっとわかる、とりわけ趣味について。私の返事では私もその話に立ち入ろう。][傍線筆者]

と記されており、Fabian がパートナーの Nakata のメールに書かれていた趣味については、同様に書こうという意図が示されている。実際に送信したメールでは、ほとんどの項目で呼応しており、そのためにいわば隣接ペアの発話に近いイメージを与えているが、メールのやりとりにはこのような呼応関係はたびたび生じており、メール本文中では改行のあとで話題転換が起こっていることが多い。

コミュニケーションの参加者は、それぞれのペアで自分とパートナーの２人であるが、やり取りの中で、コーディネートの役割を果たしている言語教育担当教員のことが言及されることがあった。（コミュニケーション上は第３の審級）

すでに言及したように、訂正は課題として含まれていたために、修復には言語的な訂正があまり含まれていない。以下は、クリスマスについて Takae が書いている箇所（引用 11）である。

(T1-M21T): Wir feiern ... ... in Japan. (T1-Z.368- 369, 391-392)

[私たちは… …日本ではお祝いをします。]（T1 の行数）

Takae は課題３「自由なテーマ、あるいはクリスマス」に沿って書いている。

このメールへの返信で Kevin はドイツのクリスマスと新年について書いている。

(T1-M23K): In Deutschland gibt es ... .　(T1-Z.419, 439)

[ドイツには… …があります。]

参加者には MSJ あるいは MSD として、つまり言語ホストであることが意識されている可能性をすでに示唆したが、社会文化的な話題になると、ランデスクンデ（Landeskunde）のいわば文化ホストとして「日本では」あるいは In Deutschland [ドイツでは]という場所マーカーがたびたび使用されることで、言語ホスト、社会文化ホストのカテゴリー化が進展したのである。

引用 12　ドイツでは家族と一緒に教会へ

In Deutschland feiern wir am 24. 12. Heiligabend, mit der Familie gehen wir in die Kirche, ... Manchmal feiern wir mit Oma und Opa zusammen. (T1-Z.439-450)

[ドイツでは 12 月 24 日に聖夜を祝い、家族と一緒に教会へ行きます、おじいちゃんやおばあちゃんと一緒にお祝いすることもあります。]

Takae の２０１２年１２月１３日付けメールで話題に出た日本のクリスマスと正月を、返信で話題にしているが、「クリスマス」を直接修復するのではなく、まず「ドイツでは」と初めて「クリスマス・イブ」「家族と一緒に」「教会に行く」「おじいちゃんもおばあちゃんも一緒に」と記述し、Takae の記述したクリスマスをドイツの文脈のなかで補っている。トラブルとは言えないが、理解している概念の違いを際立たせずに、ドイツのクリスマスの記述をすることで概念の違い、つまり友人たちとプレゼントとケーキでお祝いするクリスマスではなく、聖夜であり家族と過ごす大切な宗教的な行事であることが示されている。パートナーの記述に始まった修復の留意が、ドイツの文脈の中で修復されたのであり、日本の文脈の中でのクリスマスが否定されたわけではないが、同じ概念を繰り返し使用することで修復を開始し、ドイツのクリスマスを記述したところで終了している。つまり、２言語タンデムであるために、クリスマスという概念をめぐって発生した修復は、いずれかの社会文化規範に基づいて終了するというよりは、補完的な修復として終了していると考えられるのである。接触場面では言語ホスト場所ホストが大きな役割を担うが、２言語タンデムでは、それぞれが言語ホストと場所ホストの役割と重複して外国語話者となっているために、修復が相互的に行われたと考えられる。

引用 13　たこ焼き、豚まん、お好み焼き

Takae は 2012 年 11 月 11 日付の E-Mail で、第 2 テーマ「私の街」のもとで、出身の河内長野市と大阪に触れて、お好み焼きを紹介している。(T1-M11T)

173	J	T	私の町について話します。私は生まれてからずっと大阪に住んでいます。
174	J	T	それも、大阪の南部の河内長野市という田舎に住んでいます。
175	J	T	河内長野市は、つまようじしか有名なものはありません。
176	J	T	ですが、大阪の中心部にはたくさんのおいしい食べ物や名所があります。
177	J	T	食べ物では、たこ焼き、豚まん、お好み焼きがとてもおいしいです。お笑いも有名です。

引用 14　日本のピザいいました

これに対して、Kevin は返信で次のようにお好み焼きに触れている。(T1-M13K, Z.211-212, 235)

207	J	K	ジュッセルドルフという町まで電車で一時間がかかるので日本料理食べてみえています。
208	J	K	ドイスの町の中でジュッセルドルフは一番日本的な町ですから日本店や日本のレストランや日本本屋のでいます。
209	J	K	よく名前が知らない食事をもう食べてみることがあります。
210	J	K	でも本当な日本料理を食べてみたいんです。
211	J	K	実はタイでお好み焼きを食べてみたことがあると信しています、では知らないいます。
212	J	K	日本のピザいいました。そうだければとてもおいしい物です。

Kevin は日本食と日本食レストランからデュッセルドルフを話題にだし、そのうえでデュッセルドルフではなく、タイで食べた日本のピザを記述した。それが果たしてお好み焼きかどうか自信がないが、あれが「お好み焼き」ではないかと推測している。
これに対して Takae の返信(M15T, Z.256, 277)では、

273	J	T	私も一度だけデュッセルドルフに行ったことがあります。
274	J	T	というのも、今年の 8 月から 9 月の間に、ドイツのデュースブルクの大学で勉強しにドイツに行ったからなんです。
275	J	T	アレクはタイに行ったことがあるんですか？すごいです！
276	J	T	私も一度タイに行ってみたいです。
277	J	T	お好み焼きが日本のピザと呼ばれているのは本当です。とてもおいしいです。

ここでは、Takae は 277 行目でそれがお好み焼きであることに社会文化ホストとして確証を与えている。ここでこの修復は終了している。このように、話者交代が頻繁に起こらない E-Mail タンデムの場合でも、修復が常に発生している。

5-4　フォリナー・トーク（Foreigner Talk）

フォリナー・トーク（外国人話法）とは、ファーガソン(1971)が最初に用いたもので、ネウストプニー(1981)は、外国人場面の研究として接触場面研究についての議論をしており、その中でフォリナー・トークの特徴として、１．代名詞の使用、２．敬語使用の制約、３．児童語彙の使用、４．外国語語彙の使用、５．外国語の使用、６．ジェスチャーの使用、７．話題の制約、８．第 3 者話法をあげ、仮説的に議論をしている。以下には、Takae の日記から、フォリナー・トークを裏付ける箇所を見てみよう。「意としてではないのだが、日本語で文章を書くときに、わかりやすく書いてしまっているような気がする。また、相手の日本語での手紙を読んでいると、相手にも自分のドイツ語がこんな感じに見えているんだろうなと感じる。」(T1-TB-2T)　Takae がこの日記の記述をしたのが 11 月 24 日で第 2-3 週目のテーマ「私の街」を書いた後である。Takae の 11 月 11 日付のメールにその特徴を見てみよう。

引用 15　河内長野市は、つまようじしか有名なものはありません（Kevin に宛てて書いたメールの添付ファイルとして送信した課題２）

			M11J_von Takae an Kevin (AG2 in AT) (11.11.2012 10:42)
170	D	T	(filename) Tandem2_Takae
171	J	T	ケヴィンへ
172	J	T	メールありがとう。お元気ですか？こっちはそろそろ冬らしくなってきました。寒い！
173	J	T	私の町について話します。私は生まれてからずっと大阪に住んでいます。
174	J	T	それも、大阪の南部の河内長野市という田舎に住んでいます。
175	J	T	河内長野市は、つまようじしか有名なものはありません。
176	J	T	ですが、大阪の中心部にはたくさんのおいしい食べ物や名所があります。
177	J	T	食べ物では、たこ焼き、豚まん、お好み焼きがとてもおいしいです。お笑いも有名です。
178	J	T	私も大学の三年生です。
179	J	T	心理学は覚えることが多くて難しいですが、とても面白いです。
180	J	T	将来はカウンセラーになりたいです。
181	J	T	日本学の方はどうですか？ボーフムには大学に入ってから住んでいるのですか？
182	J	T	訂正お願いします。
183	J	T	では。
184	J	T	今田貴恵
185	J	T	P.S.　スカイプ使いますよ。

比較的メール本文の文は短めで、簡略で明瞭な文になっていることに、自ら違和感を感じている、つまりフォリナー・トークになっている可能性を示唆していると考えられるのである。加えて、Takae には、このタンデム学習を振り返るフォローアップ・インタビューを 2012 年 7 月 12 日に実施した。（約 70 分）その際のインタビュー・メモから、以下のような作業場の考え方が確認された。Takae は「私はドイツ語を勉強するのでドイツ語から」（先にメール本文を書いた）。しかし、添付ファイルでは、「Kevin が日本語を勉強するので、日本語から（先に）書いた。」「文通みたいな感じで（メールのやり取りを）していた。」

Takae の 11 月 8 日付の日記にはまだ第 1 週でメールのやり取りを始めたことで感じたこと

を記述している。メールを送信するうえでのルール作りや、リズムのようなものがないことが気になっていたが、とりあえずは相手の出方を「待っていた」。そのことに「文化の違い」があるのかないのかと思ったが、この段階での判断は「特にないのかもしれない」と２言語による E-Mail タンデムでの異文化接触場面であることから、社会言語的規範、社会文化的規範は一方が支配的になるということが生じなかったと考えられる。また、言語ホスト、場所ホストの役割も２言語同時使用による力関係のバランスがうまく取れていたと考えられる。場所ホストの意識は発生しなかったと考えられる。

> そして、メールの送るタイミングで、あちらから先に来るか、こっちが先に送るかで少し戸惑ってしまい、相手を待っていたら結局送るのが遅くなった。文化の違いとかあるのかなと思っていたけれども、特にないのかもしれない。私が先にメールを送ったのだが、私が書いた内容に合わせて返信してくれていたので、読みやすく、よかった。
>
> ドイツ語で文章を書くのは久々だったので、辞書を片手に作成した。細かい表現はまだできないので、短い文章が続いてしまった。(T1-TB-T1) [傍線筆者]

６　考察

2013 年度は授業の枠組みで、過去１週間のタンデム学習を紹介してもらう形で、自分のパートナーとのコミュニケーションの振り返りを行った。そこでたびたびふれられたのが、「先に日本語を書くと、あとでえらいことになる。」という作業の順番からくる問題であった。先に日本語を書くと自由にかけていいのだが、あとでドイツ語でもそのメールを書くとなると、自分の日本語の能力とドイツ語の能力に差があり過ぎて、ドイツ語で書けなくなることもある。そのために、できるだけ最初はドイツ語で書いてから、日本で書くようにしていたというのである。今回の報告でも一つのペアだけを取り出して分析したために、２年間の全参加者のデータからの考察ではないが、ネウストプニーが言うインターアクションの規範について、E-Mail タンデム学習プログラムでの動態性の一部が考察できた。

７　まとめ

２年間継続した E-Mail タンデム学習プログラムは、２年間の成果を踏まえて一旦終了する。授業時間外のプログラムで実施すると、プログラムへの参加とコミュニケーションを維持することが容易でなかった。そのために、２０１３年度は授業の枠組みで実施した。授業時間内で実施すると、E-Mail タンデム自体は「いつでも、どこでも」実施できるが、週に１回は時間が拘束される。そのために、参加者数は減少したが、タンデム学習自体は安定して継続され、「コミュニケーションの維持」が最上位目標になっていたことが確認できた。現在は、４学期間のデータをまとめており、この作業が終了次第、データ全体から分析と、コミュニケーションを継続したペアのコミュニケーションの質的な分析を行い、

コミュニケーションがどのように進展したのかを考察したい。また、２０１２年度の参加者からは、研究目的でのデータ提供については、違和感を感じるというコメントを寄せた参加者もあったが、２０１３年度のように授業の枠組みで、自ら E-Mail のやり取りをスクリーンに示しながら自分のコミュニケーションを振り返るような仕組みで進行すると、そのプレゼンテーションと授業の参加者とのやり取りや他のペアのやり取りにも関心を示すようになり、研究目的でのデータ使用に関しては違和感を感ずることがなくなったようである。また、学習プロセスに伴って記入させた日記にも、その時々に感じた参加者の感じたこと、考えたこと、そして行動したことが示されている。

参考文献

加藤好崇(2011)『異文化接触場面のインターアクション』東海大学出版会

スクータリデス, A. (1981)「日本語におけるフォリナー・トーク」日本語教育学会『日本語教育 45 号』〔特集〕国別の問題点（３）オーストラリア・ニュージーランドにおける日本語教育.

中川慎二(2013) 「ドイツ語=日本語二言語による e-Tandem 学習プロジェクト」『言語教育研究センター研究年報』第 16 号. 関西学院大学言語教育研究センター.

中川慎二(2010)「言語学習者のためのポートフォリオ」と自律学習:ヨーロッパ言語共通参照枠をめぐって.『言語と文化』第 13 号. 関西学院大学言語教育研究センター.

中川慎二(2006)「言語学習カリキュラムにおける相互作用」の意義をめぐって―ドイツ語インテンシブ・コースにおける授業分析―.『言語教育研究センター研究年報』第 9 号. 関西学院大学言語教育研究センター

ネウストプニー,J.V. (1995)『新しい日本語教育のために』大修館書店.

ネウストプニー,J.V. (1995)「日本語教育と言語管理」『阪大日本語研究』７.

ネウストプニー,J.V. (1986)『外国人とのコミュニケーション』岩波新書.

ネウストプニー,J.V. (1981)「外国人場面の研究と日本語教育」日本語教育学会『日本語教育 45 号』〔特集〕国別の問題点（３）オーストラリア・ニュージーランドにおける日本語教育.

Brammerts, Helmut / Kleppin, Karin (hrsg.) (2010), Selbstgesteuertes Sprachenlernen im Tandem. Ein Handbuch, 3. Auflage. Stauffenburg Verlag Brigitte Narr GmbH, Tübingen.

Byram, Michael (1997), Teaching and Assessing Intercultural Communicative Competence. Clevedon, Multilingual Matters.

Dürscheid, Christa (2003), Medienkommunikation im Kontinuum von Mündlichkeit und Schriftlichkeit. Theoretische und empirische Probleme. Zeitschrift für Angewandte Linguistik 2011 Heft 55. Gesellschaft für Angewandte Linguistik.

Egbert, Maria (2009) Der Reparatur-Mechanismus in deutschen Gesprächen. Verlag für Gesprächsforschung 2009. (http://www.verlag-gespraechsforschung.de　2014年2月1日閲覧)

Ferguson, C. A. (1971) Absence of Copula and the Notion of Simplicity; Normal Speech, Baby Talk, Foreigner Talk, and Pidgins. In: Dell Hymes (ed.) PIDGINIZATION AND CREOLIZATION IN LANGUAGE, Cambridge, University Press.

Koch, P./ Oesterreicher, W. (1985), Sprache der Nähe – Sprache der Distanz. Mündlichkeit und Schriftlichkeit im Spannungsfeld von Sprachtheorie und Sprachgeschichte. In: Romanisches Jahrbuch 36. 15-43.

Müller-Hartmann, Andreas (2000), Tandem learning. in Byram, M. (ed.) Routledge Encyclopedia of Language Teaching and Learning. Routledge, London and New York.

Neustupny, J.V. (1985), Language norms in Australian-Japanese contact situations. In: Clyne, M. (ed.) Australia, meeting place of languages, Pacific Linguistics C-92. 161-170.

Sacks, H.E., Schegloff, E.A., Jefferson, G. (1974) A simplest systematics for the organization of turn-taking for conversation. In: Language 50(4): 696-735

Schegloff, E.A., Jefferson, G., Sacks, H. (1977) The Preference for Self-Correction in the Organization of Repairin Conversation. In: Language 53(2): 361-382

Zusammenfassung

Unser bilinguales Sprachenlernen im E-Tandem besteht seit April 2012 zwischen der Kwansei-Gakuin-Universität und der Ruhr-Universität Bochum (Partner-Universität). Im Sommersemester 2012 und im Wintersemster 2012/13 haben insgesamt 42 Studierende daran teilgenommen, im Sommersemester 2013 11 Studierende, im Wintersemester 5 Studierende. Außerhalb der normalen Unterrichtsstunden haben sie E-Tandem gelernt und mit den Partnern korrespondiert, mindestens per E-mail, aber durchaus auch per Skype. Jede Mail wird als Kommunikationseinheit betrachtet, und die Kommunikationsvorgänge werden diskurslinguistisch analysiert.

In der interkulturellen Begegnungssituation, wo die MuttersprachlerInnen und die NichtmuttersprachlerInnen für die jeweilige Kommunikationssprache gemeinsam kommunizieren, wird die sprachliche Norm der Muttersprachler meistens dominant und so richtig angesehen. Aber unser Deutsch-japanisches, also bilinguales Sprachenlernen im E-Tandem passiert in den gegenseitig interkulturellen Begegnungssituationen, wo beide Sprachen in der jeweiligen Kommunikationseinheit gleichzeitig benutzt werden und sogar in erster Linie schriftlich auch als Kommunikationssprache. Deswegen wird theoretisch gesehen möglicherweise erwartet, dass die sprachliche Norm, die beim interkulturellen bilingualen Tandem-Kommunizieren wirkt, von den beiden Seiten in Hinsicht auf das Sprachmanagement und Kommunikationsmanagement anders konstruiert und rekonstruiert werde, als wo nur die MuttersprachlerInnen miteinander kommunizieren.